

# 先人の知恵から

## 29

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

中々最後が見えないこのシリーズ。何とか少しずつでも先へ進めて行こうと今回は以下の9つについて書いてみた。やっとさ行。

- 子故の闇
- 之を用いればすなわち虎となり  
用いざればすなわち鼠となる
- 子を持って知る親の恩
- 桜は花に顕る
- 触らぬ神に祟りなし
- 三歳の翁、百歳の童子
- 山椒は小粒でもびりりと辛い
- 三度の飯も強し柔らかし
- 三度目の正直

### <子故の闇>

親はわが子かわいさのあまり、理性を失い分別がつかなくなるということのたとえ。「子故の闇に迷う」「子に迷う闇」「子を思う心の闇」ともいう。

子どもが可愛いのは分かるが、学校現場でモンスターと言われてしまうような保護者に時折会う。そうした保護者の多くは、別にモンスターなのではなく、ただ自分の子が可愛くて、その子を中心に考えてしまっているからだけである。そういう時に、保護者の主張に対しいきなり「そんなことはできません。」とか「他の子とのバランスが・・・。」「お宅のお子さんだけではないので。」などと言ってしまうと、保護者は怒りをあらわにしてしまう。そんな時に、この諺をだして、「昔からこんな諺があります。自分の子が可愛いからこそ闇に飲み込まれてしまうという意味ですが、お子さんが可愛いから、お子さんを大事に思うから、こうして欲しいという希望なんですよ。」とまず、相手の気持ちを受け止めてあげる所から始めると、穏やかに話し合いができる。その上で、出来ること出来ないことをゆっくり伝えて行って、落としどころを探って行けるとよいと思う。校長室で時折、怒鳴ったり、机を蹴ったりしている保護者も人

の親。誰だって自分の子どもは他人の子より可愛いのだから。

### <之を用いればすなわち虎となり用いざればすなわち鼠となる>

人が才能を発揮するしないは、これを重く用いるかどうかによることをいう。人は重要な地位を与えられれば、虎の様に勢いづいてその素晴らしい才能を発揮して活躍するが、用いられなければ鼠のようにこせこせと逃げ隠れする人物で終わってしまうという意から。 出典 どうほうきく 東方朔 かくなんにとう 答客難

人の才能というものは、見極めが難しいことも多い。子どもの才能も然りである。発達に偏りのある子では、満遍なく伸ばそうとせず、偏らせた方が良く、虫が好きな子、恐竜が好きな子、電車が好きな子、色々である。その好きさが人並外れて凄ければ、そこを伸ばしていくと将来何かになれる可能性は高い。虎にするか鼠にするか、そこは保護者の対応如何である。そういう意味で、この故事を保護者に時々使う。

### <子を持って知る親の恩>

自分が親になり、子育ての大変さを知って、初めて親の愛情の深さや有難さがわかるということ。「親の恩は子をもって知る」ともいう。

この諺は比較的知られていると思う。自分が子どものうちは、親の大変さなどわからない。子どものうちは親に対し文句ばかり言っている。しかし、自分が子を産み、育ててみると、親の大変さや愛情を感じられるのである。親ってすごいなあ。そし

て子を育てながら親も育っていく。そんなことを伝えたくて、よくこの諺を持ち出している。

### <桜は花に顕る>

普段は他の人々と変わることなく目立たぬ存在だったものが、何か事があった時、優れた才能を世に現して非凡であることが知れることのたとえ。花が咲かなければ、ほかの木に混じってわからなかったのが、美しい開花で初めて桜であったことが知られるという意から。

毎年桜の季節になると使うことの多いこの諺。桜と言うのは花の時だけその存在を殊更に主張する。葉になってしまうと山のどこにあるのかもわからない。

桜の様に、何かの時にその才能、手腕を発揮できるのは素敵なことである。普段は目立たず、ひっそりとしていて、存在感が無い。その人にとって得意なことは、他の人が見向きもしない事だったり、他の人にはできないことだったり、他の人が苦手なことだったり。それを何の苦もなく、ささっとやってのけたりするのは凄く格好良く、煌めく。時々自己評価が低い子で、とても仕事が丁寧だったり、絵が得意だったり、或いは、掃除が上手だったり、演技が上手かったり、整理整頓が得意だったりという子に会う。そんな子の出番は必ずある。そういう時に物おしせず自分を出せるように得意な所を自分自身で認識してもらうためにも、この諺は使いやすいと思う。

### <触らぬ神に祟りなし>

関わり合いを持ちさえしなければ、災い

を受けることはない。余計な手出しはするなという教え。神様と関わり合わなければ、神様の崇りを受けることはないの意から。「触らぬ神に罰あたらぬ」「知らぬ神に崇りなし」ともいう。

子どもたちと話していると、正義感が人一倍強く、間違っていることをしていると指摘せずにはいられない子に出会う。友達同士で注意するレベルなら問題ないが、相手が大人であろうとかまわず注意してしまう子もいる。正しいことを言って何が悪いということもあり、正しいことを言っても良い時と悪い時があるという区別は付きづらい。相手がどのような人かと言うのが見極められれば問題ないが、こういうお子さんの場合はそれが難しいのである。

色々なお子さんに試してみて、こういう子は比較的諺が好きだったりすることに気づいた。もちろん確認してからではあるが。そこで、この諺を出すことがある。「昔からこんな風に言われているよ。」と説明すると、納得してくれることがある。「あ、その諺知ってる。」などと言ってくれたら大丈夫。諺がそうなら、それに従うというのである。更に「英語でもこんな風に言うんだって。」と、中高生には言ってみる。余計な知識は大好きな子が多い。保護者にも、正義感が人一倍強いお子さんにはこういう諺を伝えてみてはとお話している。

英語では・・・

Far from Jupiter, far from thunder.

(ジュピターから離れていれば、雷に打たれることはない)

### ＜三歳の翁、百歳の童子＞

人間の賢さは、年齢には関係がないものだというたとえ。若くても知恵も分別も備えている者もあれば、歳をとっていても思慮分別の無い者もあるということ。

子育ての場面でなくてもこの諺は、いつの世でも「本当にそうだなあ」と思うものではないか？年をとれば社会経験も積み、知識も増え、賢くなるものだと思っても、実際には、幾つになっても社会常識からかけ離れ、利己的で、分別の無い大人に遭う。一方で、十代でも、知識も豊富で、分別もあり、社会常識もある子どもに遭う。人は年齢で測るものではなく、どの様に社会に向き合ってきたか、どの様に知識を蓄積してきたか、どの様に生きてきたかによって全く成長度合いが違う。ただただ知識を詰め込むだけでもいけない。社会に関わって、人と関わって生きて行くことが、とても大事だと思う。そういう意味で、保護者や子どもたちにこの諺を使うことがある。

### ＜山椒は小粒でもぴりりと辛い＞

体は小さくても気力が鋭く才能や力量が優れていて、侮れない事のとえ。山椒の実はとても小さいが、非常に辛いことから。

最近のお子さんは体格が良い。小学生でも高学年になると160cmや大きい子では170cmなどという身長の子もいる。どちらが先生かわからないこともあるくらいだ。一方で、背の低い子もいる。その差は大きい。中学や高校、大学に行っても背が低いことがコンプレックスの子は結構いる。い

じめられたり、馬鹿にされたりすることもある。

そんな子にこの諺を伝えている。見た目や体の大きさと人の価値が決まるわけではない。人はみんなそれぞれに良さを持っている。その良さを伸ばすためにも、背が低いことのコンプレックスを吹き飛ばすことはとても大事だと思う。

英語では・・・

Little head great wit. (小頭の大知患者)

Little heads may contain much learning. (小さな頭にも多くの知恵が入る)

### <三度の飯も強し柔らかし>

世の中のことは、中々自分の思う通りにはならないものだというたとえ。毎日三度炊いている飯でさえ、固かったり柔らか過ぎたりして思うようにはいかないという意から。

今時は電気炊飯器等を使うので、余りご飯を炊くたびに硬さが異なるということはないだろう。鍋で炊いていたころは、水加減、火加減すべて身体で覚えるので、日によって硬さが変わることも多々あった。この例を分かってもらうには、若者には難しいのかもしれないが、要は、世の中が自分の思い通りには中々行かないということ伝えるための諺なので、世の中が便利になっても、やはり思い通りに行かないことがほとんどだという話に繋げている。

### <三度目の正直>

物事は、一度目や二度目はうまく行かなくても、三度目にはうまくいくということ。

また三度目の失敗は許されないということ。

一度失敗すると「もういい」とか「二度としない」とかと言う子が最近結構多い。失敗は成功の基とも言う。エジソンがフィラメントを発明した時、何百回も何千回も失敗した話は有名である。その話も出しながら、一度や二度の失敗でくじけないことの大切さを伝えている。失敗をなんどもすることで、改良や改善がある。テレビドラマの下町ロケットの話でもたくさんの失敗の結果最高のものが出来上がる過程が随分と示されていた。

努力を続けることも段々苦手になりつつある子どもたちに、コツコツと頑張ることのすばらしさを伝えられたらと思う。

英語では・・・

All things thrive at thrice. (物事はみな三度目に首尾よく行く) The third time pays for all. (三度目が全ての埋め合わせをする)

出典説明

### 東方朔著「答客難」

東方朔は中国、前漢の文学者。字、曼倩(まんせい)、機知とユーモアで武帝から寵愛された。しかしその後の問題行動から身分が下がったり上がったりした。「答客難」「非有先生之論」をはじめ幾つかの詩文を残した。「答客難」は、朔自身が自分を自嘲して書いたものと言われる。変人と言われている。